

もはや、「去就」を決断する時！

「最後のチャンス」を逸った国労臨大

すべての国労組合員の皆さん！もはや「去就」を決断する時である。と同時に、「真面目に働いていれば・・・」という「甘い幻想」も断ち切る時である。

国労の第五〇回臨時全国大会は、予測どりの「波乱の幕開け」となった。

挨拶にたった山崎委員長は、「一日千秋の想いで本部の決断を待っている多くの組合員がいることも確かであり、彼らの要望に積極的に応えなければなりません」として「緊急対応方針」を「満場一致で決定して頂きたい」と訴えた。

ところで、「一日千秋の想いで本部の決断を待つて」いた国労組合員の皆さん！しかし、この残された「最後のチャンス」も結局、組合員不在の派閥間の「不毛な論争」によって逸ってしまった。

「（主流派は）『臨時大会で採決に入れば数で負ける』との危機感も同時に明かにし、組織の分裂を防ぐ立場から『今度の大会を流会として、（執行部方針を）一般組合員の全員投票に付したあと、改めて臨時大会を開く方法もある』との考えを提示した」（九日付、読売）という。また時間の引き延ばしである。つまりもはや、国労丸のカジはきかないということである。

かりに、極めて少ない可能性として本部原案がかるうじて通ったと仮定してみよう。さて、反対派の旗頭、わが国労東京の幹部がこれに素直に従うとはどうてい考えられない。そこで、労使共同宣言（＝雇用安定協約）の締結は、絵に書いた餅とならざる得ないという事態が発生する。

また、主流派、非・反主流派双方ともに国労の「分裂」という事態だけは、避けたいとの意向が強いたもいわれており、「妥協案」の成立という事態も考えられよう。だが、少なくとも「残された時間の無い」なかで、この道をとることは「自殺行為」である。

ともかく、いずれの道を選択しようと、国労丸の行方は決まったということである。とりわけ反対派の旗頭、わが国労東京の「死導」にいつまでもつき従うことは、「極めて不幸な事態」を招来させることになる。もちろん、そうしたい人にはその自由があることとはいうまでもない。

残された時間は限られている。そして、すでに国労の組織率は過半数を割った。このままでもなにかなる」という、ささやかな「期待」や「希望」に身をまかせすることは、「最後のチャンス」を逸った国労と心中する道を選ぶことである。

さて、残された「最後のチャンス」は、貴方自身の「決断」である。
一日も早く、わが動労の旗のもとに！

一九八六年一〇月 九日

国鉄動力車労働組合東京地方本部